

NEJIREBANE, No. 105, 30. June. 2003

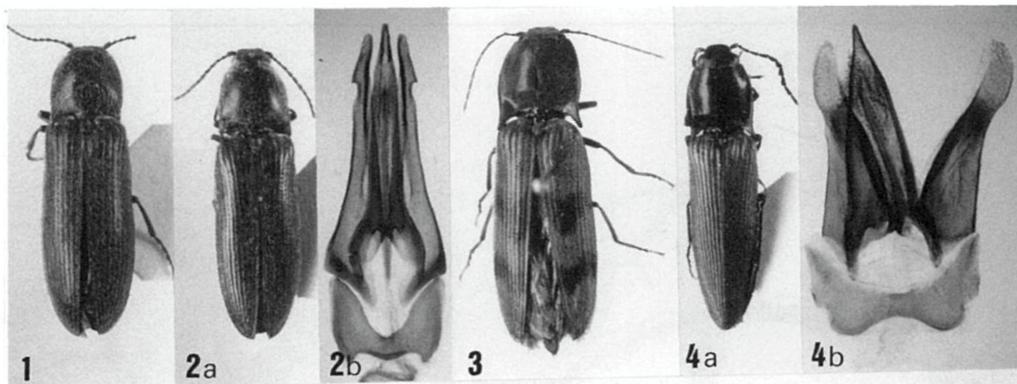
マレーゼトラップによる大澤正嗣氏蒐集の 秩父山塊産コメツキムシ

岸井 尚

〒569-1044 高槻市上土室 1-10, 6-410

2000年の9月初旬に、山梨県森林総合研究所の大澤正嗣さんから、森林生態系モニタリングのためにマレーゼトラップで得られたコメツキムシの同定を依頼され、その後3年間引き続きその貴重な資料を検査する機会を持たせていただいている。山梨県のように周囲を異なる高い山岳系で囲まれている地域での甲虫相には、自ずから複雑な様相が見られるであろうことが考えられる。更に山梨県内で韮崎市を挟んで秩父山塊とは逆の西南に位置する鳳凰山周辺分布相については、筆者は1989年以来今日まで細田倅さんと水野弘造さんのご好意で、実に多くの資料を研究させていただき、膨大な新しい知見を得、それとの比較検討も出来るので大澤さんからのご依頼は誠に有りがたいものであった。ここで上記各氏には心からの謝意を表したい。

この地域のコメツキ相についての最初の報告は、千葉敬愛短大生物研究会の加瀬ひろ子(1971: 56-58)による“山梨県金山付近のコメツキムシ類”と思われ、地域的には今回の瑞牆山と同じ山系の金峯山山麓の増富鉱泉・金山高原・木賊峠で蒐集された資料に基づき27種が記録されている。加瀬はそのあとがきに“種が少なく、分布上特記すべきものもなく”など、大変謙遜された表現でその成果を纏めておられるが、決してその様なことはなく近来注目されつつある分布学の見地からは、極めて貴重な記録であることは間違いない。更に最近(2000)、鈴木互博士により主として1988年に得られた資料をもとに、“山梨県瑞牆山麓周辺域のコメツキムシ科甲虫”と題された報告がなされ、91種がスイーピング法・ビーティング法・石起こし法・燈火採集法で得られている。今回のマレーゼトラップ法で得られる種はその採集方法の特性から、特定の生態をもつグループに限定されざるを得ないと思われるが、これらの記録並びに資料を比較すると、この地域のコメツキムシ相の豊富さは、先に述べた鳳凰山周辺のそれと同じく特筆に値すると言えよう。この点については鈴



1, ルイスカネコメツキ (♀, 10.7 mm); 2a, シナノカネコメツキ (♂, 11.9 mm); 2b, 同, 雄交尾器 (8045); 3, ガロアムネスジダンダラコメツキ (♀, 19.3 mm); 4a, キムネスジコメツキ (♀, 13.4 mm); 4b, 同, 雄交尾器 (8048).

木も同様の感想を記している。

以下に報告するものは、この間の 3 年間に筆者が直接検した 50 種の記録である。内 14 種は上記鈴木¹⁾の記録にはない追加種なので、この地域のコメツキムシ科甲虫は 105 種の生息が判明し、これは殆どが一様な森林地域での分布相としては極めて多いものと言える。なお、その調査域は山梨県北巨摩郡須玉町 (秩父山塊西部) 瑞牆山 (瑞垣山) 周辺、植生は人工カラマツ林、ブナ林などで、採集期間と標高は次の通りである。1999年、5-8月、1450-1700 m; 2000年、5-7月、1450-1700 m; 2001年、6-8月、2230 m。

Cidnopus marginipennis (LEWIS, 1894) ルイスカネコメツキ (写真 1)

1 ♀, 19. VII. 2000

関東及び中部の山岳地帯の草原やその周辺の林間で花に集まるが多くない。従来の報告例は栃木・新潟・山梨・長野の 4 県のみである。雌貯精嚢内表面には微小な突起構造が網目状にあり、他のカネコメツキ類のそれと類似する。この地域からは加瀬 (1971: 57) が *Nothodes marginipennis* として記録している。なお、鳳凰山周辺での採集記録は未だない。

Nothodes marginicollis (LEWIS, 1894) ウスチャイロカネコメツキ

1 ♂, 19. VII. 2000; 2 ♀♀, 21. VI. 2000.

前種に似るが、より軟弱な細型で色彩も明瞭に淡色である。青森から宮崎辺りまで広く分布し、里山などのより低高度の山地帯でカエデなどの花によく集まる。鈴木 (2000: 8-9) は 8 頭記録しており、加瀬 (1971: 57) の報告にも見られ、鳳凰山周辺でも極めて多く見られる。

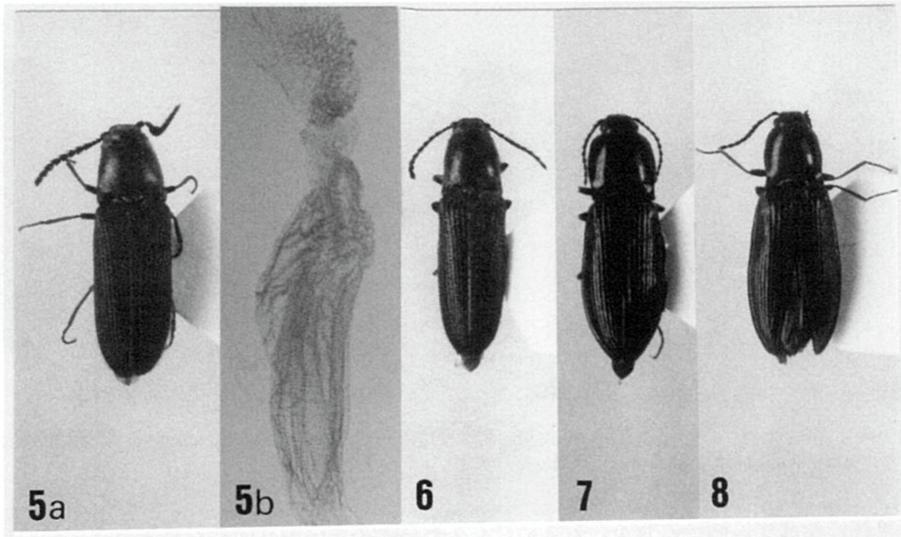
Limonius eximius LEWIS, 1894 ムラサキヒメカネコメツキ

1 ♂, 12. VII. 1999.

邦産のコメツキ中で美しいものの一つで、上翅の濃紫色の色調は安定していて分かり易い。筆者はかつてこのグループに、本邦で昆虫蒐集熱が生じた頃からの著名な採集地であった、京都洛北の貴船溪谷に因んだ新属名 *Kibunea* を提唱し、暫くこれが用いられていたが、ヨーロッパ原産の種で創設された *Limonius* の基本種と同じ構造を持つとして原記載の属に戻ったものである (SANCHEZ-RUIZ, 1996: 108)。ただしこのヨーロッパ産の種と本邦分布の複数種とでは、雄交尾器構造でやや異なる特徴をもっている。本州以南の各地から知られているが、山梨県からの本属の種は続く 2 種が従来知られていたのみで山梨産の本種は初めて検した。これは本種が高地よりも低山地などの里山の環境に適した生態をもつためであろう。

Limonius ignicollis LEWIS, 1894 キムネヒメカネコメツキ (写真 5)

1 ♀, 19. VII. 2000.



5a, キンムネヒメカネコメツキ (♀, 7.8 mm); 5b, 同, 雌貯精囊; 6, コウイチヒメカネコメツキ (♀, 7.1 mm); 7, チャグロヒラタコメツキ (♀, 7.6 mm); 8, クロツヤヒラタコメツキ (♀, 7.4 mm).

邦産コメツキの中で最も美しい種として代表的な本種は、北海道および本州各地から知られているが多いものではない。しかし山梨県では鳳凰山で多数個体が採集されており、瑞牆山周辺でも鈴木 (2000: 10) により五里山から記録されている。また一般にカネコメツキ類雌の貯精囊内には微細突起による網目状構造が一面に分布する (写真 5b)。

Limonius kouichianus (KISHII, 1989) コウイチヒメカネコメツキ (写真 6)

1♀, 25. VII. 2001.

この属の種は LEWIS (1984) が記載した 3 種が長く知られていたが、それからほぼ 100 年後に、山梨県鳳凰山御座石鉱泉の細田倅市さんがその周辺で採集された複数の個体に基づき、本邦第 4 番目の種として記載されたものである。 *L. approximans* キアシヒメカネコメツキによく似ているが、脚部は常に暗赤色から褐色、前胸背板点刻はより疎で、雄交尾器側片先端の形状が明瞭に異なる。その後鳳凰山周辺では度々採集され、筆者の知る限りではほぼ 20 頭を越えているようである。他の地域からの採集例はなかったが、静岡県側の富士山麓での記録が最近なされ、更に今回の秩父山塊での発見で、中部関東の山岳地域に分布することが明らかになった。なお、本属からはその後極めて小型で、ヨーロッパの本属基本種に似た別種も、鳳凰山と三重県亀山市の野登山から発見されている。

Limoniscus yamato KISHII, 1998 ヤマトカネコメツキ

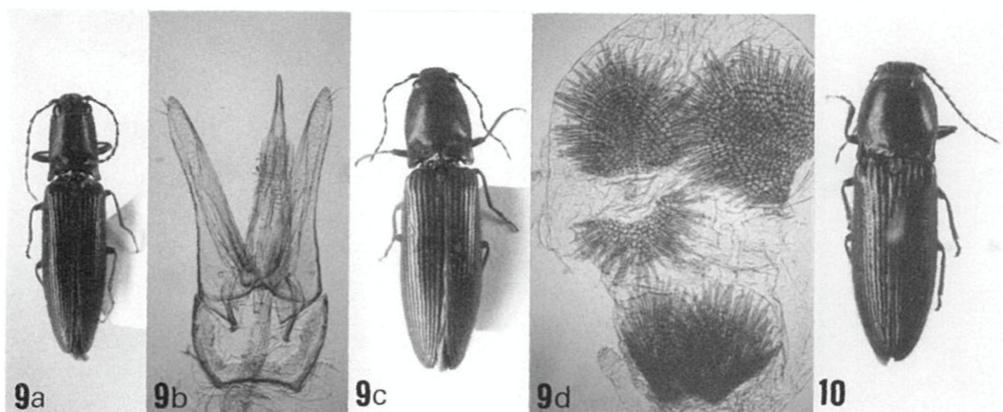
1♀, 19. VII. 2000.

本州北端部から中国地方、四国、九州に広く分布する大型のカネコメツキで、かつて長く北海道分布の *L. niponensis* ニホンカネコメツキと同種と見なされていたものである。鈴木 (2000: 9-10) はこの地域から 8 頭記録しているが、近似の次種の記録はない。

Limoniscus hinakurai KISHII, 1998 シナノカネコメツキ (写真 2)

1♀, 4. VI. 1999; 1♂, 1♀, 9. VIII. 1999; 1♂, 1♀, 25. VII. 2001; 1♀, 8. VIII. 2001.

前種と共に従来は *L. niponensis* の名で報告されていたが、筆者 (1998: 2-7) はこのニホンカネコメツキは北海道固有の種で、本州以南に分布する個体群は別の 2 種からなると判断し、それぞれ上記の様に命名した。ヤマトカネコメツキは一般に低山地などで見られ、体毛が黄金色で、雄交尾器側片先端の鈎状基部が単純に丸く別られ、その後方で側縁は外方へ膨らむことなく、細



9a, チャイロツヤハダコメツキ (♂, 10.8 mm); 9b, 同, 雄交尾器 (8324); 9c, 同(♀, 13.6 mm); 9d, 同, 雌貯精囊内ブラシ状円盤型角質板 (8320, 8322); 10, ヒメクツヤハダコメツキ (♂, 12.2 mm).

く単純に基部片に向け太まる。本種シナノカネコメツキはより高地の草原の多い林間部で見られ、体毛は銀白色、雄交尾器側片先端鈎状部の基部は強く丸く剔られ、その後方で側縁は明瞭に外方へ膨らみ基部片方向に伸びる(写真2b)。現在、本種の分布は本州に限られ、新潟・長野・京都・奈良から記録されており、今回の山梨県下の記録は初めてとなるが、瑞牆山周辺では明らかに前種より多く見られる。

Harminius (Harminius) nikkoensis Miwa, 1928 キムネスジコメツキ(写真4)

1♂, 22. VII. 1999; 1♀, 18. VII. 2001.

Miwa (1928: 134) は当初独立種として記載したが、後(1934: 108)に近縁の次種の異常型の一つとして処理し、以後長くその様に扱われていたが、筆者(1979a: 5-6)は記載内容に合致する複数個体と本属に入る多くの資料との比較検討の結果、本種は独立種と見なすのが妥当と判断した。本種は本属の他種と異なり上翅のいわゆるだんだら様の斑紋は認められず、上翅全体が一様な汚黄色を呈するが、時に淡茶褐色の個体もあり、この秩父山塊の資料はその茶褐色個体であった。また本種の前胸部は上翅肩部よりやや細めで、側縁が強く外方へ弧状に膨らむこともなく、また雄交尾器中片の基部は他種より著しく太く、側片先端も極めて短大で本属の既知種とは明瞭に異なる(写真4b)。これまでに記録されたのは福島・栃木・山梨・長野4県の山地のみである。鈴木(2000: 10-11)は次種 *H. galloisi* と *H. singularis hondoensis* コガタムネスジダングラコメツキの2種を記録しているが、本種は記録していない。

Harminius (Harminius) galloisi Miwa, 1928 ガロアムネスジダングラコメツキ(写真3)

1♀, 9. VIII. 2000.

邦産のムネスジダングラコメツキ類で最も大型、強壯な体形で分かり易い種で、本州以西の山地での燈火採集によく集まり、島嶼では隠岐からも記録されている。瑞牆山周辺では五里山からの鈴木(2000: 10)による報告がある。

Stenagostus umbratilis (Lewis, 1894) オオツヤハダコメツキ

1♂, 26. VII. 2001.

瑞牆山周辺では鈴木(2000: 11)により多くの個体が記録されている。北海道から九州まで広く普通に見られ、島嶼の多くからも記録され、夜間燈火に集来することが殆どで、昼間飛翔するものは極めて少ないようである。

Scutellathous comes (Lewis, 1894) チャイロツヤハダコメツキ(本州亜種?)(写真9)

1♂, 9. VIII. 1999; 1♂, 26. VII. 2000; 1♂, 3♀♀, 9. VIII. 2000; 2♂♂, 1♀, 25. VII. 2001; 1

♂, 26. VII. 2001; 1♂, 5♀♀, 8. VIII. 2001.

従来、山梨県からは本種以外に本属の報告例はなく、鈴木(2000: 11)は *sp. 1*, *sp. 2* として種名未定の2種を記録しているが、前者は多分 *S. sasajii* ホソアカツヤコメツキ *comes* と見なししている種で、後者は本種とも異なる種と思われる。本種の体色は全体が明るい黄赤色のものから赤褐色のものまでの変化が見られ、後者はホソアカツヤコメツキと極めて紛らわしいが、これまでに瑞牆山で検したものは1頭を除いて両性の生殖器構造からは本種と見なしうるもので、鳳凰山と共に得られた個体はこの赤褐色化の強いものであった。しかし少なくとも本州に分布する本種 *comes* と見られる個体群は近似の2種からなり、前胸背板点刻の密度と形状など及び両性生殖器構造などの違いで互いに別種と見なしうる。その内少なくとも1個体群はOHIRA (1963:16)が富士山の朝霧高原からの1♀で記載した *S. fujianus* フジチャイロツヤハダコメツキと主要な特徴は、この雌の体長(14 mm)が著しく大きい点を除きよく一致する。しかし、これも今回検した9頭の雌資料中には図示(写真9c)した大型個体13.6 mm(一般に12 mm前後)のものが見出された。なお写真(9a, 9c)でも分かるように、本種の前胸形状は性差が著しく別種の感を抱かせるので注意を要する。本種 *comes* は札幌原産でLEWIS, (1894: 200)が雄3頭目の資料で記載した *Athous comes* (体長12 mm)で、記載文からは広く本州の山地で得られ、従来一般にこの種と特定されている個体群と同じものと見なされる。しかし残念ながら筆者は北海道産の資料を検する機会に恵まれず、果たして本州で多くの個体が得られている個体群が北海道のものと同じであるか否かを判断できない。しかし大平(1996: 71, Fig. 2, F)が図示した北海道産の雄生殖器側片先端の構造には本州産個体群との差異点が認められるので、これがもし固定的なものであれば、*fujianus* は多くの特徴から多分にこの本州産の *comes* と見なされてきた個体群との同質性が高く、*comes* の本州分布の別亜種と考えるのが妥当な処置であろう。

Scutellathous sp. ツヤハダコメツキ一種

1♂, 9. VIII. 2000.

従来、本州内で最も多く得られていた *Scutellathous* 属の種個体群は長くチャイロツヤハダコメツキと称されているが、前述したように本州内からの資料は複数の種個体群に分けられ、その一つはこれの別亜種で、別に別種と見なすものが混在すると思われる。更に本州以西に分布するものには、外部形態でも両性の生殖器構造でも複数の差異点を持つ幾つかのグループがある。これらの中にはやや小型で一般に黄色味の明瞭な、前胸背板点刻がやや疎な一群があり、その両性生殖器構造でも幾つかの差異点を指摘できるので、多分これは異なる種個体群と見なすべきで、今回これと同じと見られる上記資料が見付かった。これは多分、鈴木(2000: 11)の *S. sp. 2* を指すものと思われるが不明である。

Hemicrepidius (Hemicrepidius) secessus secessus (CANDÉZE, 1873) クロツヤハダコメツキ

1♀, 29. VII. 1999; 1♂, 9. VIII. 1999; 1♂, 9. VIII. 2000; 2♀♀, 25. VII. 2001; 2♀♀, 8. VIII. 2001.

加瀬(1971: 57)は本種のみを多数(104 exs.)報告しているが、次種は記録していない。これとは逆に鈴木(2000: 11-12)は本種の記録をしていないが、次種をほぼ110頭記録している。加瀬の場合は、次種を本種と同じものと見なした可能性が強い。今回両種共に見られたが、一般的には前胸背板点刻と体形・体色、特に脚部のそれとで両種を区別でき、次種は高地に多く、本種は低地で多く見られるのが普通であるが混棲することもある。本州以南に分布し、南西諸島および済州島からは複数の亜種が知られる。

Hemicrepidius (Hemicrepidius) sinuatus sinuatus (LEWIS, 1894) コクロツヤハダコメツキ

2♂♂, 29. VII. 1999; 1♀, 9. VIII. 1999; 2♂♂, 19. VII. 2000.

前種の変異型と見なされていたが、体形がより軟弱なこと、前胸背板点刻が極めて微細で疎な点や、脚部の色彩その他の差異点と、前種は一般に低山地に見られ、本種はより高地に多いことなどで別種とされている。屋久島では高地に極めて小型繊細な別亜種(*satouchii*)が見られるが、低地では前種の大形強壮な別亜種(*yakuanus*)が棲み分けて分布する。済州島にも別亜種が

知られる。

Hemicrepidius (Hemicrepidius) desertor desertor (CANDÉZE, 1873)

ヒメクロツヤハダコメツキ (写真 10)

5♂♂, 25. VII. 2001; 2♂♂, 8. VIII. 2001.

鈴木 (2000: 32) は生息期待種として挙げたが、加瀬 (1971) と共に記録はない。今回記録した7頭の雄資料は全て前胸背・上翅共に黒色でクロツヤハダに似ているが、上翅の金緑色光沢が明らかである。本州以西の山地に見られ、対馬・屋久島・奄美大島・済州島などからはそれぞれ別亜種が知られる。

Hemicrepidius (Miwacrepidius) subcyaneus (MOTSCHULSKY, 1866) ルリツヤハダコメツキ

1♀, 25. VII. 2001.

マレーゼトランプではこの1頭のみであるが、鈴木 (2000: 12-13) は多くの資料を記録している。本邦独自の亜属を構成する種で、一般に軟弱な体構造のツヤハダコメツキ類の中では珍しく極めて強壯な体構造をもち、青藍色の色彩は特異である。本邦固有種で北海道から九州までの山地に分布する。

Corymbitodes concolor (LEWIS, 1894) ホソヒラタコメツキ

1♂, 14. VI. 1999.

鈴木 (2000: 19-20) は本種を含め *C. gratus* ドウガネヒラタコメツキを多数記録し、加瀬 (1971: 57) は *C. nikkoensis* ベニホソヒラタコメツキも報告している。

Calambus japonicus (Fleutiaux, 1902) クロツヤヒラタコメツキ (写真 8)

1♀, 14. VI. 1999; 1♀, 14. V. 2000; 1♀, 21. V. 2001; 1♂, 21. VI. 2001; 1♀, 25. VII. 2001.

次種と混同されることの多かった種であるが、鈴木 (1989: 1-3) によって両種の違いが明らかにされた。瑞牆山周辺では混生するが、鈴木 (2000: 17) でも分かるように本種の方が多い。しかし鳳凰山周辺では次種の方がやや優勢のようである。本州以南の各地から知られる。

Calambus mundulus (LEWIS, 1879) チャグロヒラタコメツキ (写真 7)

2♀♀, 25. VII. 2001; 1♀, 8. VIII. 2001.

前種によく似ているが、写真 7, 8 でも分かるように雌個体では前胸の形状が互いに明瞭に異なり、体色並びに触角節の形状と長さなどの違いでこの両種は容易に分けうる。前種と同じ様な分布を示すが、本種の方は北海道・樺太などからも記録されている。

Anostirus (Ipostirus) daimio (LEWIS, 1894) ダイミョウヒラタコメツキ

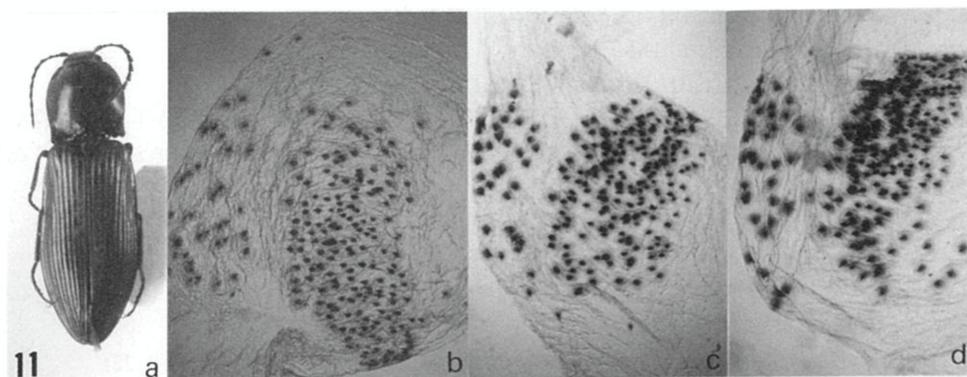
1♀, 21. VI. 2000; 1♀, 21. VI. 2001.

加瀬 (1971: 57), 鈴木 (2000: 18-19) 共に多くの個体を得ているが、今回の手法では少ない。黄色上翅にある顕著な5黒紋は、一般に色彩的な変化の少ない本邦分布のコメツキ中では例外的に目立つ存在である。このグループはユーラシア大陸の主として北部域に分布し、40種弱知られている (TARNAWSKY, 1996: 617-622)。本種は本邦固有の種と見られるが、Kon-Kuk Univ. PRESS (1994: 159) に韓国産種として挙げられた例がある。しかし、その他のこれまでの朝鮮半島産コメツキに関する多くの報告には、本種の記録は見あたらず、近縁の *A. boeberi* のみで、これは筆者も故竹内吉蔵博士が1935-1936年に北朝鮮の白岩 (Paegam) や南雪嶺 (Namsollyong) で採集された、黄褐色の上翅にやや不鮮明な5黒紋をもつ雌雄各1個体を検している。KIM (1978: 110) が図示した合水 (Hapsu) 産の資料もこれとよく似ている。中国東北・ロシア沿海州からの多くの個体も検したが、これらは薄い紋のある中国産の1雌を除き何れも無紋の型であった。しかし、今のところ本種が朝鮮半島に分布する可能性を否定はできない。

Pseudanostirus dilatatus (MIWA, 1928) オオクロヒラタコメツキ (写真 11)

1♀, 19. VII. 2000; 1♀, 25. VII. 2001; 1♀, 8. VIII. 2001.

Pseudanostirus 属は旧ソ連 (現ウクライナ) の DOLIN (1964: 120) により *Anostirus* 属の亜属として創設され、ユーラシア大陸中北部で多くの種 (GURJEVA, 1989: 155-176, 18種, 1亜種) が知



11 オオクロヒラタコメツキ: a, ♀, 12.6 mm; b, 雌貯精囊内角質小突起群 (8329, 瑞牆山); c, 同 (2340, 奥日光); d, 同 (2333) 北海道川湯温泉).

られ、現在は独立属として扱われている。邦産種は本種のみで GURJEVA (1984: 295–297) が *Corymbites* 属からこの属に移した。筆者もかつて本種を初めて採集したとき (1951年, 大雪山及び然別湖畔), 新属の創設を真剣に考えたものだ。当時は大陸産近縁種についての情報を全く持ち合わせず気になっていたが, DOLIN と GURJEVA の論文並びに東欧産の *Diacanthus globicollis* (属基本種) を検し得て解決したものである。樺太・北海道・利尻島・国後島と本州中央高地帯で見られるが極めて少なく, 本州での記録は群馬・長野のみで山梨からは鈴木 (2000: 17–18) が瑞牆山から1頭 (19. VIII. 1988, 酒井貢 leg.) 記録したのが初めての記録である。今回これと同じ秩父山塊で得られた3頭の雌個体の上翅は共に明瞭な赤褐色であるが, 従来知られていた地域の個体は全て黒色で, 筆者の検し得た本州産の奥日光・木曾御岳の資料と北海道産の複数個体全てがやはりそうである。鈴木 (2000) 及び大平・飯島 (2001: 47–51) の報告では上翅色彩に関する記述は特にないので黒色と見てよいであろう。この赤色上翅の個体群では, 貯精囊内の角質小突起板の形状は他地域産の上翅黒色のものより明瞭に小型で, 上翅の黒色のものでも北海道と本州のものでは差が認められ (写真11, b–d参照), 同じ本州産個体でも今回の瑞牆山の上翅赤色ものと奥日光および木曾御岳の上翅黒色のものでは微妙な差が認められる。ただ大平・飯島 (2001: 47–51) の報告にある図では突起の数が異常に少なく (50個弱), これらが全て個体変異的なものかどうかは, 残念ながら本種の調査資料数が極めて少ない (北海道産: 1♂, 3♀♀; 本州産: 5♀♀) ため不明で, 本州産雄を含め多くの標本の検討が望ましい。雄交尾器については北海道北見市置戸鹿ノ子温泉産 (♂, 24–25. VII. 1990, 清野昭夫 leg.) のもので検したが, これは GURJEVA (1989: 159, 165–166, fig. 318) が図示したものと異なった点はなく, この GURJEVA の用いた資料は樺太 (3 exs.) 及び国後島 (1 ex.) のもので, その図示した個体は樺太産であり, 北海道産は樺太と同じ個体群に属するものと見なしてよいであろう。

Selatosomus (Eanoides) puerilis (CANDÉZE, 1885) シリプトヒラタコメツキ

1♀, 9. VIII. 2000; 1♂, 3♀♀, 21. VI. 2001; 1♂, 1♀, 22. VI. 2001; 1♀, 25. VII. 2001.

本種の所属については研究者により諸論があり, その主要な点については鈴木 (2000: 18) の報告に詳しい。筆者は本属の種多数との比較で, 本種は形態と生態を含めて極めて独特の個体群であると思うので, 上記のように別亜属と見なしたい。また本種では雄交尾器側片先端の形状で2系統に分けうるが, 外部形態などでは有意な差異点は認められず, 現時点では同種内の変異として扱うこととする。本属の種は北半球の中北部に広く分散適応していて, TARNAWSKI (1995: 1–183) によれば現在5亜属, 67種 (亜種を含む) に分類されている。本種は邦産 (北方四島を含む) が確認されている8種 (他に分布疑問の2種あり) の中では, 小型で且つ本州以西の各地

で最も普遍的に分布し、低山地周辺で得られる種である。

Denticollis miniatus (CANDÉZE, 1885) ミヤマベニコメツキ

1♀, 14. VI. 2000; 3♂♂, 10♀♀, 21. VI. 2000.

次種と共によく飛翔しているのを見かける種で、マレーゼトラップには掛かりやすい種であろう。鈴木(2000: 13)の報告でも両種共に多数の記録がある。本州以西の低山地およびより高地帯に多い。

Denticollis nipponensis nipponensis OHIRA, 1973 ベニコメツキ

3♂♂, 4♀♀, 14. VI. 2000; 1♂, 9♀♀, 21. VI. 2000; 3♂♂, 12♀♀, 21. VI. 2001.

前種とほぼ同じ分布状態であるが、平地などより低山地帯で多く見かける種で、北海道には別亜種(*ainu*)が分布する。

Ampedus (Ampedus) matobai yamayai KISHII, 1987 ヤマヤアカコメツキ(写真12, 22)

1♀, 21. VI. 2001; 1♀, 8. VIII. 2001.

これまでも度々述べてきたように、本属 *Ampedus* に属するコメツキは北半球全域に亘り多くの種に分化していることが明らかになっている。本邦でも例外でなく2002年現在で既に広義の本属の種と亜種は計130余り報告されており、今後も更に20-30種ほどの増加は見込まれる。瑞牆山周辺では今回13種が確認され、鈴木(2000: 21-23)の報告でもやはり計13種記録され、内5種は今回未発見のものであった。本種は一見すると本邦での最普通種 *A. orientalis* アカコメツキや *A. gozaishi* ゴザイシアカコメツキに極めてよく似ているが、雌貯精囊内の刺状突起の形状と数が著しく異なる(写真22, 24)。原名亜種は北海道分布個体群で、本亜種は福島県湯ノ花温泉から得られた2頭の雌資料で記載され、栃木県栗山村からの資料も検している。今回の資料は外部形態では同種と判定できるが、貯精囊内刺状突起は形状などの特徴では同じであるが数は明らかに多い。地域的変異の可能性と思われるが、資料数が少ないので疑問も残る。

Ampedus (Ampedus) alticola alticola SILFVERBERG, 1977 ミヤマアカコメツキ(?)

1♂, 26. VII. 2000.

LEWIS(1894: 36-37)が日光で得たアカコメツキを *Elater montanus* として記載したが、北東ヨーロッパ産の *Elater montanus* SCOPOLI, 1763 のホモニムとなり、上記名称に変更されたもので、中部・関東・東北の山地で見られるが少ない。兵庫県からも記録され和歌山からの報告例もあるが、近畿地域では極めて少なく、北海道からは別亜種(*tokoro*)が知られる。瑞牆山からは加瀬(1971: 57)が *A. montanus* として記録している。今回得られた上記標本の交尾器側片形態には多少特異な点があり、比較検討の対象資料が少ないので本種と同定するにはやや疑念が残る。

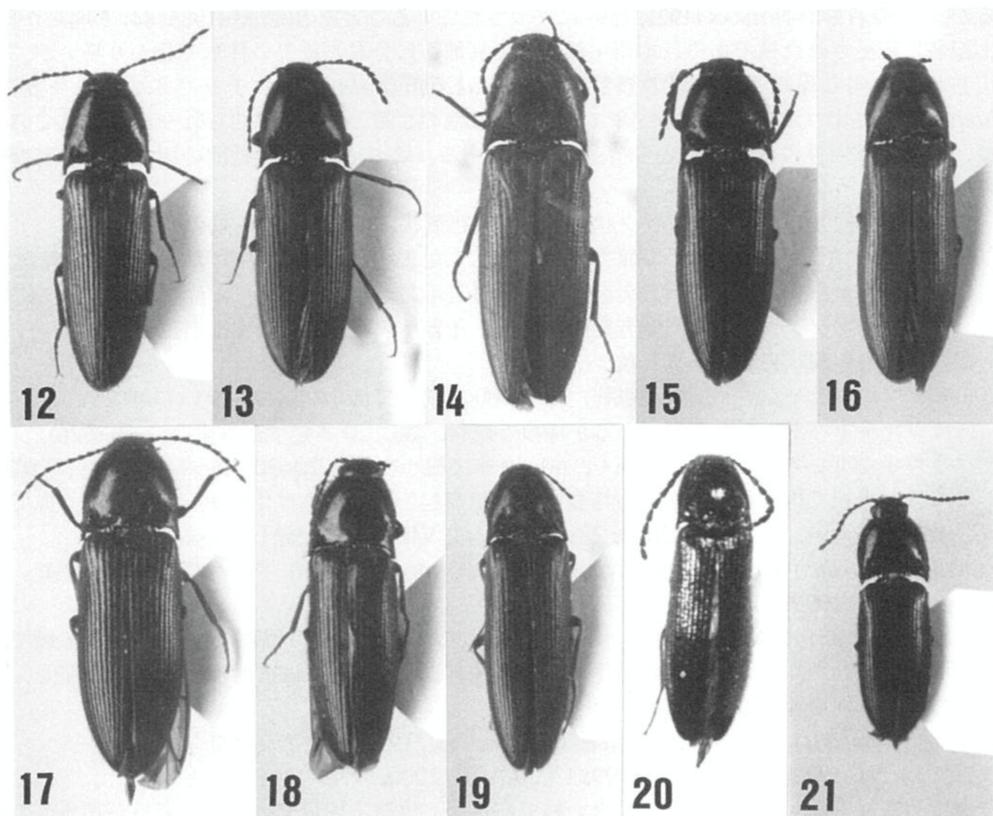
Ampedus (Ampedus) chlamydatum (LEWIS, 1894) ホソアカコメツキ(写真13, 23)

1♀, 21. VI. 2000; 2♀♀, 25. VII. 2001.

LEWIS(1894: 36)による本種の原因は“Kadzusa, an island off Yokohama”となっており、上総を指すなら千葉県であるが、横浜沖の離島とは少々意味不明で、大平(1973:102)はBATES(1883)によるLEWISの行程記録から伊豆大島辺りかと推定している。更に大英博物館に所蔵されている基準標本(♂)検討でも産地は不明で、東京都の高尾山産の1頭の資料とよく一致し同じでないかとも述べている。伊豆大島からはアカコメツキ類の報告例はなく、本属の種としては *A. hypogastricus* アカハラクロコメツキのみである。筆者はLEWISと大平の記述によく一致する山梨県産の2頭の資料(KISHII, 1996: Fig. 56 参照)がこれと同じ種と見ている。今回得られた上記の3頭の雌貯精囊内刺状突起の数が何れも15-20%程少ないが、その形状及び外部形態の相同性などでは同じ種と認められる。現在判明している分布地は山梨・東京・(千葉)・栃木・福島・青森であるが何れでも少ない。

Ampedus (Ampedus) optabilis optabilis (LEWIS, 1894) オオアカコメツキ(写真14)

1♀, 2. VII. 1999; 1♀, 21. VI. 2000; 1♀, 19. VII. 2000; 1♀, 26. VII. 2000; 1♂, 3♀♀, 9. VIII. 2000; 1♂, 1♀, 25. VII. 2001; 1♀, 8. VIII. 2001.



12, ヤマヤアカコメツキ (♀, 10.7 mm); 13, ホソアカコメツキ (♀, 9.8 mm); 14, オオアカコメツキ (♂, 12.5 mm); 15, ゴザイシアカコメツキ (♀, 11.0 mm); 16, ミヤマホソチャバネコメツキ (♀, 9.8 mm); 17, ホソクロコメツキ (♀, 10.6 mm); 18, ケバカコクロコメツキ (♀, 8.8 mm); 19, ミヤマタテスジコメツキ (♂, 10.7 mm); 20, ミヤマクロコメツキ 近似種 (♀, 7.2 mm); 21, チビクロコメツキ (♀, 6.8 mm).

前種より大型で体毛は黄褐色，前胸背板側縁が前方へ強く狭まり前胸は台形状に近い。アカコメツキ類は一般に体形色彩などが互いによく似ており，且つ最近の検討で種類数が極めて多くなり（ほぼ 70 種，他に亜種も多い），その分類同定は極めて困難であるが，幸いにも両性の生殖器官構造の違いが明瞭である。本種は瑞牆山から鈴木 (2000: 22) による 1 例の記録がある。本州・九州の山地で見られるが，北海道及び四国からは別亜種 (*kusui* 及び *awa*) が知られる。

Ampedus (Ampedus) gozaishi KISHII, 1990 ゴザイシアカコメツキ (写真 15, 24)

1 ♀, 21. VI. 2000; 1 ♀, 26. VII. 2000; 1 ♀, 22. VI. 2001; 1 ♀, 25. VII. 2001.

鳳凰山の御座石鉾泉周辺で極めて多くの資料が蒐集されたが，他地区からの記録例は少ない。現在まで山梨県内では今回の秩父山塊と大菩薩嶺の日川林道 (1 ♀, 28. VI. 1981, 奥田好秀 leg.) の資料を検したが，他府県のものとしては栃木県黒磯市日留賀岳付近 (1 ♂, 30. VI. 1996, 大川秀雄 leg.) の標本を検したのみである。これらの資料を採集され快く筆者に検討を任された上記の両氏に深い謝意を表したい。本種の上翅色彩は黒味がかった濃赤色で独特である。鈴木 (2000: 32) は，瑞牆山での生息期待種の一つとして挙げている。

Ampedus (Ampedus) tokugoensis W. SUZUKI, 1985 ミヤマホソチャバネコメツキ (写真 16, 25, 30)

1 ♀, 21. VI. 2000.

当初 MIWA (1934: 76) が信濃徳本峠産の 1 頭により *Elater longipennis* の名で記載したものであ

るが、この名称が NOTMAN (1921: 159) に先取されていることを SUZUKI (1985: 84) が明らかにし、上記名に変更された種である。本州中部以北の高地帯に分布し細長い体形で分かり易いが、中部山岳地帯では同じ環境下で近似の複数種 *A. amakazaricola* ミヤマチャバネコメツキ及び *A. houwau* ホウオウホソアカコメツキ(上翅色彩は他の2種と同じ) が知られ一見よく似ているので、同定には両性の生殖器構造の精査が必要である。これら近似の3種間の両性生殖器構造の違いは次のようになる。

雄交尾器側片先端の三角形フック状部、側方突起形状、および中片先端の形状。

ミヤマホソチャバネ：短小で側方突起は小さく丸まり(写真30)、中片は細短くやや鈍端。

ミヤマチャバネ：短小で側方突起は明瞭に幅広く丸まり(写真28)、中片は短く狭まり鈍端。

ホウオウホソアカ：細長く側方突起は小さく丸まり(写真29)、中片は細長く鋭利。

雌貯精囊内の刺状突起の形状と数。

ミヤマホソチャバネ：細長く鋭利、大小100本前後で微小突起は少ない(写真25)。

ミヤマチャバネ：やや大型であるが極めて鋭利、数は20本位で最も少ない(写真26)。

ホウオウホソアカ：微小で細長く、60-80本で微小突起が20-30個位塊状に存在(写真27)。

この秩父山塊で得られた標本の貯精囊内の刺状突起の形状はホウオウホソアカとよく似ているが、数は2倍近い。また鈴木(2000: 23)も2 exs. (3. VII. 1988) 記録している。

Ampedus (Ampedus) hypogastricus hypogastricus (CANDÉZE, 1873) アカハラクロコメツキ

1♀, 22. VI. 1999.

鈴木(2000: 23)は3頭記録している。本邦のクロコメツキ類では最も普通に見られる種で、腹部が赤黄色で分かり易いが、時に黒化する個体もある。屋久島には別亜種(*kosugi*)が産し、北海道産個体群も別亜種と見られる。

Ampedus (Ampedus) japonicus japonicus SILFVERBERG, 1977 アカアシクロコメツキ

1♀, 14. VI. 1999; 1♀, 22. VI. 1999; 1♀, 9. VIII. 2000.

環境的には生息しておかしくない種であるが、瑞牆山周辺では今回の資料が初めてのもののようである。当初 LEWIS (1894: 40) により *Elater rufipes* として記載されたが、DEGEER (1774: 150) に先取された名称のため上記のような新名が付された。屋久島から別亜種(*kosugiensis*)が知られている。

Ampedus (Ampedus) tenuistriatus (LEWIS, 1894) ホソクロコメツキ(写真17)

1♂, 18. V. 1999; 1♀, 4. VI. 1999; 1♀, 14. VI. 1999; 2♀♀, 22. VI. 1999; 1♀, 12. VII. 1999; 2♀♀, 21. VI. 2000; 2♀♀, 19. VII. 2000; 3♀♀, 21. VI. 2001; 3♀♀, 25. VII. 2001.

中部・関東以北の山地帯では一般的に本種によく似た次種の方が多く見られるが、この地域では検した資料の殆どが本種であった。瑞牆山周辺では加瀬(1971: 57)の記録がある。本州以南の平地低山地に普通に見られ、屋久島にも産するがこれは別亜種であろう。

Ampedus (Ampedus) aureovestitus aureovestitus KISHII, 1966 ケブカコクロコメツキ(写真18)

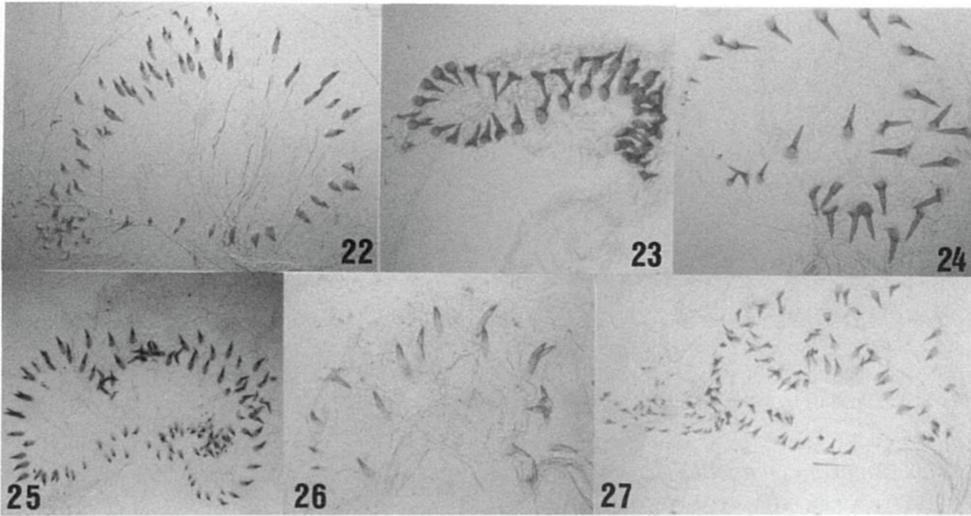
3♀♀, 21. VI. 2000; 1♀, 22. VI. 2001.

関東北部から東北地方全域で *A. oiwakensis* の名で報告された例が多いが、全て本種を指すものと思われる。前種に似るが体形はやや軟弱で体毛は長く一般に黄色みを帯び、両性の生殖器構造も似ているが差異点も明らかである。前種は本州・四国・九州各地の低山地に多く見られるが、本種は近畿以北のやや高度のある山地に多いようである。山梨県での記録は初めてと思われる。北海道には別亜種(*katoi*)が分布する。

Ampedus (Ampedus) gracilipes (LEWIS, 1894) ミヤマタテスジコメツキ(写真19, 31, 36)

1♂, 29. VII. 1999; 1♀, 19. VII. 2000.

LEWIS (1894: 42) が中禅寺湖で採集した2頭の資料で命名したもので、記載文の体長 9.5 mm、細長い体形、上翅肩部が茶褐色、または全体が黄褐色で側縁と縫合線部が黒色、触角と脚部は赤褐色、触角は細く弱い鋸歯状で第3節は強固でなく前節より僅かに長いという内容に似た種は、本



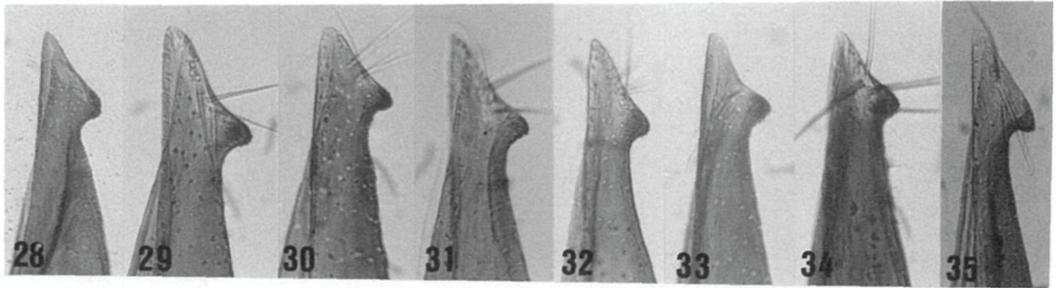
22-27: アカコメツキ類雌貯精嚢内刺状突起群: 22, ヤマヤアカコメツキ (8312, 瑞牆山); 23, ホソアカコメツキ (8315, 瑞牆山); 24, ゴザイシアカコメツキ (8313, 瑞牆山); 25, ミヤマホソチャバネコメツキ (8103, 瑞牆山); 26, ミヤマチャバネコメツキ (5126, 立山); 27, ホウオウホソアカコメツキ (5608, 鳳凰山).

邦では本種を含めて10種近い種が分布し、大部分は未記載種と見られる。高い確度で本種と同定し得る資料を筆者が検したのは今回のものと、鳳凰山からの雌雄各1頭のみである。これまで本種と見なしていた多くの資料は互いによく似てはいるが、原記載内容とは微妙な外形形態上の差異点と、両性生殖器構造のそれぞれの個体群との明瞭な差などで複数の別種であると判断される。これまでに報告されている本種の分布域は北海道から九州までの広い範囲に及ぶが、全て再検討が必要であろう。既知種でこの地域に分布が予想されるのは本種と、*A. (A.) alpinus* ミヤマクロコメツキ (鳳凰山系) 及び *A. (A.) yaku ohdai* オオダイクロコメツキ (石鎚・剣山系, 台高山系, 鳳凰山系) の3種で、前者と見ていた次項に挙げた種は同定の間違いで未記載種である。また後者は鳳凰山系で分布が確認されており、また大和村の笹子峠産資料を検しているので (1♂, 20. VI. 1988, 水野弘造 leg.), 奥秩父山系の分布はあり得るが報告例はない。なお、本種に著しく似た種で体形は短大強固、雌の上翅にある黄色縦条も明瞭であるが、触角第2-4節の形状及び長さとの比率の著しい差などの顕著な特徴を持つ未記載の別種も存在する。

Ampedus (Ampedus) sp., near *alpinus* KISHII, 1992 ミヤマクロコメツキの近似種 (写真 20, 35, 40)

1♂, 28. V. 1999; 1♀, 2. VII. 1999; 1♀, 21. VI. 2000; 1♂, 21. VI. 2001; 1♀, 2. VI. 2001.

当初 *A. (A.) alpinus* ミヤマクロコメツキの近似種と見ていたが、前種の検討でこれらとは異なる未記載種であると分かったもので、鈴木 (2000: 23) が *A. sp.*, near *gracilipes* ミヤマタテスジコメツキの近縁種として3頭の記録をしているがこれと同じものの可能性が高い。これまで筆者が *gracilipes* または *alpinus* と見なしていた資料の中で、山形・三重・奈良・徳島などの高地帯から記録されたものは、本種及び複数の未記載種であった。何れもこれらに似ているが、小型でより軟弱な体形をもち、触角の第2・3節が著しく短小でほぼ同大同形の点で、何れとも明瞭に異なる種で、それぞれ別個体群として3グループあり、何れも既知種ではないと見られる。雄交尾器側片先端のフック状部形状と、雌貯精嚢内の刺状突起の大きさ、形および数によっても何れも明瞭に区別できる。一般に雌では上翅肩部から後方へ細く黄褐色の縦条をもつものが多く、ミヤマタテスジコメツキと似た点もあるが、より小さく繊細な体形で区別しやすいのと、両性の生殖器構造の違いがはっきりしている点で分かり易い。何れにしろ前項でも述べたように、このグループ既知種6種 (亜種を含む) と共に再検討が必要である (写真31-40参照)。



28-35: 雄交尾器側片先端: 28, ミヤマチャバネコメツキ (4296, 苗場山); 29, ホウオウホソアコメツキ (7512, 鳳凰山); 30, ミヤマホソチャバネコメツキ (3853, 大菩薩峠); 31, ミヤマタテジコメツキ (8047, 瑞牆山); 32, ミヤマクロコメツキ (5774, 鳳凰山, holotype); 33, ヤクキスジクロコメツキ (4228, 屋久島宮之浦岳); 34, オオダイクロコメツキ (2175, 大台ヶ原山, holotype); 35, ミヤマクロコメツキ近似種 (7513, 瑞牆山).

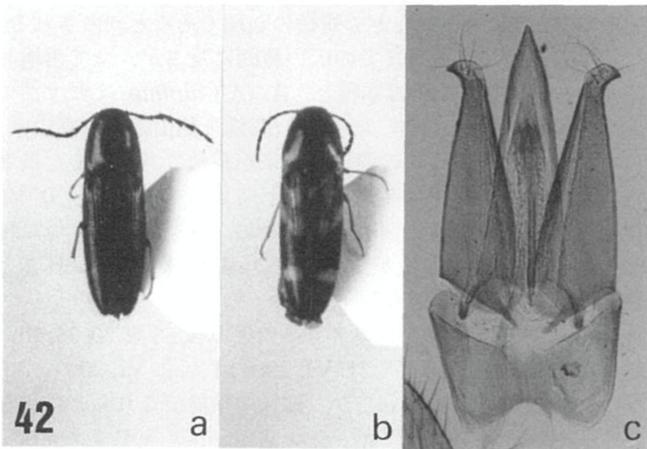
Ampedus (Ampedus) pauxillus (LEWIS, 1894) チビクロコメツキ (写真 21, 41)

5 exs., 21. VI. 2000; 1 ♀, 21. VI. 2001.

本州では青森から奈良までの10県と徳島からの記録があるが少なく、殆どが高地帯での1~2例のみで、中部・関東の山岳地帯からが主である。瑞牆山からは鈴木 (2000: 22-23) が1例記録している。なお、大澤正嗣さんからの私信によれば、本種はマレーゼトラップには極めて多数の個体が掛かるということである。

Gamepenthès pictipennis (LEWIS, 1894) キマダラコメツキ (写真 42)

2 ♂♂, 26. VII. 2000; 1 ♂, 1 ♀, 9. VIII. 2000.



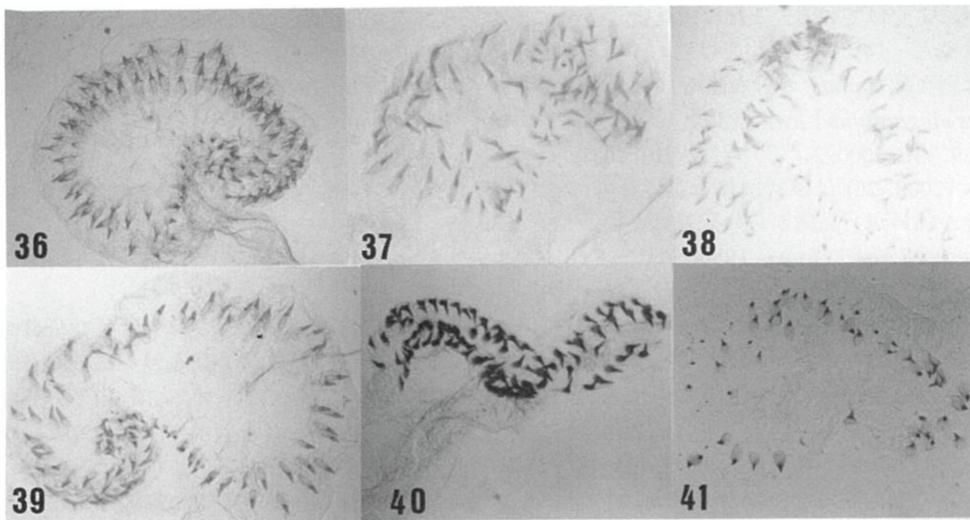
瑞牆山周辺では多いようで、鈴木 (2000: 23) は6頭記録している。上翅肩部の黄色縦斑で分かり易い種であるが、雄交尾器も側片・中片共に幅広く、特に側片先端は半円形の横長で、中片は長三角形で先端に向け一様に細まる (写真 42c)。北海道から九州までの山地で見られる。

42, キマダラコメツキ: a, ♂, 6.0 mm; b, ♀, 6.2 mm; c, 雄交尾器 (8102).

Dalopius exilis KISHII, 1956 ナガナカグロヒメコメツキ

1 ♂, 1 ♀, 22. VI. 2001; 4 ♂♂, 26. VII. 2001; 1 ♀, 9. VIII. 2001.

本種も瑞牆山周辺では普通に見られる種で、鈴木 (2000: 26-27) によると70頭余の記録がある。Dalopius属は我が国と北米で多くの種に分化しており、互いに外形・色彩などがよく似ているので、一部の種以外は分類の困難なグループであるが、雄交尾器の側片と時には中片の先端形状に種毎の特徴がある。本邦からは11種の分布が知られ、本種は其中でも最も広く普通に見られる種の一つである。



36-41: 雌貯精囊内刺状突起群: 36, ミヤマタテスジコメツキ (8328, 瑞牆山); 37, ミヤマクロコメツキ (6406, 鳳凰山); 38, ヤクキスジクロコメツキ (3878, 屋久島花之江河, holotype); 39, オオダイクロコメツキ (8297, 奈良県彌山); 40, ミヤマクロコメツキ近似種 (8046, 瑞牆山); 41, チビクロコメツキ (8100, 瑞牆山).

Ectinus puberulus (MIRWA, 1928) キンケオオカバイロコメツキ

1♂, 28. V. 1999.

瑞牆山周辺からは加瀬 (1971: 58) と鈴木 (2000: 25) による7頭の記録があるが, 鳳凰山でも標高の高い地域で多く見られる. 北海道札幌市からの資料で記載され, 東北地方から紀伊半島までの山地帯でも知られる. また愛媛県石鎚山成就社から石原他 (1953: 75) が, 熊本県水上村市房山から筆者 (1979b: 35) が記録したが, 四国・九州からの個体には多少異なる特徴が認められるので, 別亜種と見るべきかも知れない. また筆者 (KISHII, 1984: 52) は京都市貴船溪谷産の資料 (1♂, Kibune, Kyoto, 29. IV. 1959, 芝田太一-leg.) を本種として報告したが, 交尾器形態には大きな差異点があり, 或いは未記載のものとも思われる. しかし, この地域での採集活動は現在でも盛んであるが再報はない.

Ectinus longicollis (LEWIS, 1894) ムネナガカバイロコメツキ

1♀, 26. VII. 2001.

本種は山梨県では多く, 鈴木 (2000: 25) も多数報告しており, 鳳凰山周辺でも多く見られる. 本種並びに次種は形態・色彩の極めて近似した別種 (*hidaensis*, *nipponicus*, *obakoae*, *obscurilineatus*, *saitoanus* etc.) が多く, 同定の多少厄介なグループであるが, それぞれ雄交尾器の形態が異なるのと, それぞれの種の分布域が余り重なっていない傾向がある. 本種の分布域は関東・中部の山岳域が主で, 筆者の検し得た資料でこれまでに確実に本種と同定できるものは, 秋田・福島・栃木・埼玉・新潟・富山・福井・山梨・長野・岐阜・兵庫・鳥取からの資料で, 大部分は栃木から岐阜までの地域のものであった. 四国・九州からの記録もあるが, これらは再検討が必要に思われる.

Ectinus sericeus sericeus (CANDÉZE, 1878) カバイロコメツキ

1♂, 1♀, 21. VI. 2000.

この地域には本属 *Ectinus* の仲間は鈴木 (2000: 24-26) によると5種の生息が知られ, しかも何れも極めて多くの個体が得られている. しかし今回のマレーゼトラップでは3種のみで本種以外では個体数も極めて少ない, これが本属の種の飛翔傾向を示すものか不明であるが興味深い. 本種と前種はよく似ているが, 最近記載された *E. hidaensis* ヒダムネナガカバイロコメツキもま

た互いによく似ている。これは鳳凰山周辺では多く見られるが、瑞牆山周辺からの記録例はない。本種は樺太・ロシア沿海州をはじめ本邦各地の低山地から高地帯の広い範囲で分布が知られ、対馬には別亜種 (*babai*) が分布する。

Agriotes elegantulus LEWIS, 1894 ヒメカバイロコメツキ

1♂, 9. VIII. 2000; 2♂♂, 1♀, 8. VIII. 2001.

鈴木 (2000: 26) は多数個体を記録している。本邦固有種で本州・四国・九州の各地で知られ、訪花性が強いが、島嶼からの記録はない。

Vuilletus yamazakii OHIRA, 1986 ツヤミドリヒメコメツキ

1♀, 14. VI. 1999.

本州で見られるミドリヒメコメツキ類は主として前胸背板の点刻状態で4ないし5種に分けられているが、お互いに生殖器官の構造も両性共に殆ど同じに近く、更に強い訪花性やほぼ同じ時期の発生など生態的にも殆ど変わらず、微妙な違いを如何に考えるかで判断することの多い仲間で、便宜的な分類の可能性もあり問題の多いコメツキである。しかし、その中で本種のみは分かり易い種で、体表の光沢は赤銅色に近い個体が多く、一般にやや大型円筒形でよく肥大し、また前胸背板の点刻間は広く平滑で艶が目立つ。現在、山梨・長野・愛知・三重のやや高地で報告されている。なお、鳳凰山周辺では本属で最も普遍的に見られる *V. viridis* ミドリヒメコメツキが多数得られており、当初この亜種として記載され、現在はその個体変異とされていることの多い *V. subopacus* コミドリヒメコメツキも多く混棲している。これらは共に今回検し得なかったが、鈴木 (2000: 28) は6頭を報告している。

Dolerosomus gracilis (CANDÉZE, 1873) キバネホソコメツキ

2♂♂, 28. V. 1999; 1♀, 14. VI. 1999.

出現期が早い種で、鈴木 (2000: 27) は多くの個体を記録している。本邦固有の種で、北海道から九州までの各地と多くの島嶼から記録され、早春に訪花性の強い代表的なコメツキである。

Melanotus castanipes matsumurai SCHENKLING, 1927 ハネナガクシコメツキ

1♂, 28. V. 1999; 1♂, 22. VI. 1999; 1♂, 9. VIII. 2000; 1♀, 26. VII. 2000.

クシコメツキ類の中でも原型的な感じの強い体形を持ち、原名亜種は北半球の温帯北部山地の森林域に広く分布する。本邦に分布する個体群は一般に赤褐色味が明瞭でやや軟弱な体形をもち、上記のように別亜種と見ている。

Melanotus correctus correctus CANDÉZE, 1865 ヒラタクロクシコメツキ

1♀, 18. VII. 2001; 1♂, 25. VII. 2001.

本邦固有種で本州・四国・九州の各地と粟島・佐渡島・隠岐・平戸島・種子島などから知られ、北海道では渡島小島からの記録もある。鹿児島県佐多岬・屋久島・口之永良部島のもものは別亜種 (*issikii*) であるが、種子島のももこの亜種かもしれない。

Melanotus legatoides KISHII, 1975 ヒメクシコメツキ

1♀, 25. VII. 2001.

この地域から本属 *Melanotus* の仲間は、鈴木 (2000: 28-30) によると7種の生息が知られる。しかし今回のマレーゼトラップでは上記の3種のみで個体数も少ない。これもカバイロコメツキの項で述べたように本属の種の生態に関係するものか興味深い。

Quasimus japonicus KISHII 1959 ニホンチビマメコメツキ

1♀, 21. VI. 2000.

本邦では *Quasimus* 属は極めて多くの種の分布が知られ、亜種を含めてほぼ40弱のものが報告されている。普通、草原と森林の境界近くの灌木・低木などの葉上で見かけられる本種は、これらの中では最も普遍的に分布する本邦固有の普通種で、島嶼では三重県桃頭島と長崎県五島の中通島から記録がある。一般にこの仲間はよく飛翔するが、微小な体なので強い上昇気流の多い山地ではそれに乗って移動することが多いものと思われる。

参考文献

- DEGEER, C. (1774). Memoires pour servir a l'histoire des Insectes. 4. Stockholm: 10+456pp.
- DOLIN, V. G. (1964). Licinki zukov-scelkunov (provolocniki) eyropejskoj casti SSSR, Kiev: 1-206.
- GURJWA, E. L. (1984). Novyi vid zhuka-shchelkuna roda *Pseudanostirus* DOL. (Coleoptera, Elateridae) saltaja i iz Severnoi Mongolii, Leningrad, 9: 295-297.
- (1989). Zhuki-shchelkuni (Elateridae), Podesmeistvo Athoinae, triba Ctenicerini.. Fauna SSSR, **XII** (3), Leningrad: 1-293.
- 石原 保, 他 (1953). 石鏡山と面河溪の昆虫相. Trans. Shikoku Ent. Soc., Ehime, **3**: 5-137.
- 加瀬ひろ子 (1971). 山梨県金山付近のコメツキムシ類. 千葉敬愛短大生物研究会々報, (3): 56-58.
- KIM, Chang-Whan (1978). Distribution Atlas of Insects of Korea, Ser. 2, Coleoptera, Korea Univ. Press, Seoul: 1-414.
- KISHII, T. (1979a). Some New Forms and Records of Elateridae in Japan and its Adjacent Area. Some New Forms of Elateridae in Japan (XIV). Annl. Rep. Priv. Schs. Kyoto Pref., **17**: 1-21.
- (1979b). Some New Forms and Notes of Elateridae. Some New Forms of Elateridae in Japan (XV). Bull. Heian High Sch., Kyoto, **23**: 31-43.
- (1984). The Elaterid-beetles of the Tribe Agriotini from Japan (Coleoptera: Elateridae, Elaterinae). "The Elateridae of Japan", *ibid.*, **28**: 11-77.
- (1996). Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area (14), *ibid.*, **39**: 1-40.
- (1998). Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area (16), *ibid.*, **41**: 1-28.
- (2001). Revision of the Genus *Scutellathous* from Japan, with Descriptions of Two New Species and Taxonomic Notes on its Relatives (Elateridae, Coleoptera). "Some New Forms of Elateridae in Japan (XXXI)". SUKUNAHIKONA. Spec. Publ. Japan Coleopt. Soc., **1**: 205-214.
- Kon-Kuk University Press (1994). Check List of Insects from Korea. The Entomological Society of Korea & Korean Society of Applied Entomology: 133-701.
- LEWIS, G. (1894). On the Elateridae of Japan. Annl. Mag. nat. Hist., [6]13: 25-48, 182-201, 311-320.
- MIWA, Y. (1928). New and some rare species of Elateridae from the Japanese Empire. Ins. Mats., Sapporo, **2** (3): 133-145.
- (1934). The fauna of Elateridae in the Japanese Empire. Rep. Dept. Agr. Gov. res. Inst., Formosa, **65**: 1-289.
- OHIRA, H. (1963). New or little known Elateridae from Japan. VI (Coleoptera). Trans. Shikoku ent. Soc., Ehime, **8** (1): 15-18.
- 大平仁夫 (1973). 日本産コメツキムシ科の知見 (XIV). Kontyu, **41** (1): 102-105.
- 大平仁夫・飯島一雄 (2001) 北海道産オオクロヒラタコメツキについて. 標茶町郷土館報告, 13号: 47-51.
- SANCHEZ-RUIZ, A. (1996) Catalogo bibliografico de las especies de la familia Elateridae (Coleoptera) de la peninsula Iberia e islas Baleares. Doc. Fauna Iberia 2. Mus. Nac. Cis. Nat., Com. Sup. Inv. Cis., Madrid: 1-265.
- SUZUKI, W. (1985). On some Elateridae of the far east (Coleoptera). Trans. Shikoku ent., Soc., Ehime, *e*, **17** (1/2): 79-89.
- 鈴木 互 (1989). 日本地域におけるコメツキムシ科の分類学的覚書(III). 甲虫ニュース, **83** & **84**: 1-4.
- (2000). 山梨県瑞牆山麓周辺域のコメツキムシ科甲虫, 1988年の資料を中心として. 研究と評論, 法政大学第二高等学校, 川崎, **63**: 1-35.
- TARNAWSKI, D (1995) A revision of the genus *Selatosomus* STEPHENS 1830 (Coleoptera: Elateridae: Athoinae: Ctenicerini). Wrocaw: 1-183
- (1996) A world catalogue of Ctenicerini FLEUTEAUX, 1936 (Coleoptera: Elateridae: Athoinae). Genus, Wrocaw: **7** (4): 587-663.

(きしい たかし)

会 報

'02 Japan Coleopterists' Meeting

日本甲虫学会2002年度年次大会・日本鞘翅学会第15回大会・合同大会

2002年11月23日(土祝)・24日(日), 大阪市立自然史博物館(大阪市東住吉区)において, '02 Japan Coleopterists' Meetingが開かれ, 170名の参加がありました。



規制緩和に対する緊急アピールを両学会名で採択したあと、午後には同定会、分科会と、非常に慌ただしいスケジュールでした。同定会では会場が非常に混雑し、順番待ちが多くて同定してもらえなかった人も多かったようでした。また分科会も、カミキリ、雑甲虫、ゴミムシ、ハネカクシ、DNA、ゾウムシのテーマで開かれ、興味を同じくする人たち同士で、情報や意見の交換が活発に行われました。

特別展示室ではポスター発表と、大会期間(2日間)限定の故・林匡夫博士カミキリムシコレクション展も開かれ、ホロタイプもほぼすべて公開展示されました。

両学会の史上初の合同大会ということで、参加者も北海道から沖縄まで全国に及び、わが国の甲虫研究史上に残る大会になりました。(初宿成彦)

初日は午後の各学会総会をはさみ、朝から夕方まで一般講演がつづき、午後6時からは長居球技場のレストランで懇親会が開かれました。大林延夫・大会副会長の乾杯で始まり、佐々治寛之・大会会長の締めでお開きになるまで、全国の甲虫屋が多く集い、語らう場となりました。

2日目は佐藤正孝さん、森本桂さん、野村周平さんによる特別講演、つづいて大型甲虫類輸入



発行：2003.6.30. 日本甲虫学会(会長 佐々治寛之)
 (本部) 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付
 振替口座: 00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>
 Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: shiyake@mus-nh.city.osaka.jp

ねじればね原稿送付先(和文, E-mailでの投稿を歓迎します)

伊藤建夫 〒614-8371 八幡市男山雄徳8 E7-303 Tel.(Fax) 075-983-3491

E-mail: itokyoto@gb3.so-net.ne.jp

保科英人 〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育地域科学部地域環境講座

Tel: 0776-27-8692 E-mail: hhoshina@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp

水野弘造 〒611-0002 宇治市木幡熊小路19-35 Tel.(Fax) 0774-32-4929

E-mail: kzmizuno@oak.ocn.ne.jp

入会及び会費問合せ先(年会費5,000円, 入会金は不要)

野村英世 〒590-0144 堺市赤坂台1-18-5 Tel. 0722-98-4066

昆虫学評論原稿送付先(英文)(昆虫学評論参照)

安藤清志, 芦田久, 林靖彦